

## 脊髄小脳変性症に対する長期外来リハビリテーションの効果

菊地 豊<sup>1)</sup> 児玉 悦志<sup>1)</sup> 美原 盤<sup>2)</sup>

1) 脳血管研究所美原記念病院 神経難病リハビリテーション科

2) 脳血管研究所美原記念病院 神経内科

**[はじめに]**脊髄小脳変性症(SCD)は、小脳および脳幹、脊髄がびまん性に変性する進行性疾患である。近年、SCDに対するリハビリテーション(リハビリ)の有用性が報告されているが、長期のリハビリ効果についての検討は十分ではない。そこで、長期間にわたり外来リハビリを実施している SCD 患者を対象に、臨床症状の変化について後方視的に検討した。

**[方法]**2011年4月から2015年4月まで当院に1年以上、ほぼ週1回の頻度での外来リハビリ通院歴のある SCD 患者 26 例(64.8±11.8 歳)を対象として、Scale for the assessment and rating of ataxia (SARA)を後方視的に検討した。外来リハビリ開始時 SARA から外来終了時 SARA の差分を期間で除した値を $\Delta$ SARA とし、疫学データと比較検討した。

**[結果]**外来リハビリ通院患者の $\Delta$ SARA は 1.78/年であった。疫学データ(Yi-Chang ら、2011)の年間変化量は 2.8/年であり、およそ 45%程度 SARA スコアでみる臨床症状の悪化が少なかった。

**[考察]**定期的に長期の外来リハビリを行った SCD 患者では、自然歴よりも SARA スコアでみる変化量が少なかった。従って、SCD 患者に対する長期にわたる外来リハビリには、患者の症状進行を緩和する効果が期待できる。